おおさき古川秋祭りの大名行列

宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長　平川 新（ひらかわ あらた）

未来への航路

㉘伊達政宗の参勤

海岸地図の作成

マニラ発でメキシコに向かうスペイン船の寄港地を探すために、ビスカイノは仙台領の港湾調査を実施しました。塩竈から海路の探検を始め、石巻を経由して牡鹿半島をめぐり、雄勝湾や気仙沼湾、大船渡湾を視察し、越喜来湾まで到達すると仙台に戻っています。

マニラから黒潮に乗って北上したスペイン船は、北緯40度付近の日本の沖合から偏西風を利用して東に向きを変えてメキシコに向かっていました。越喜来より北に寄港地をつくると東航する航路に戻りにくくなるからです。

仙台に帰還したのは12月8日でしたから、およそ3週間を費やしています。仙台に戻ったビスカイノは日本人画家に頼んで、海岸線や発見した港と入江を描いた地図をつくりました。探検隊に測量士はいたでしょうが、地図学者がいなかったためだとあります。日本人画家は西洋式の地図の作り方を習得したのではないでしょうか。

ビスカイノは折々に政宗に書簡を出して、調査の進展具合を報告していましたが、仙台に戻って調査全体のマップと報告書を作成したのでしょう。幕府の許可を得た探検でしたから、地図は江戸で二代将軍秀忠にも提出されています。この地図が日本でもスペインでも発見されていないのは残念です。

服従など目的

仙台に戻ったビスカイノは、政宗に会うことができませんでした。すでに江戸に出立したあとだったからです。政宗が家臣の茂庭綱元に宛てた書状によると、12月14日は久喜（埼玉県）に在宿していますから、それより1週間ほど前に仙台を出発しています。12月6日か7日になりますので、仙台に戻ったビスカイノとはタッチの差でした。

ビスカイノの記事で興味深いのは、政宗の江戸出府について「皇帝の部下の領主全員がこの時期に宮廷に参内する習慣があるとしている点です。スペイン人は家康のことを皇帝と呼んでいました。

これまでの研究によると、主君への参勤は室町将軍や豊臣秀吉に対しても行われていました。1600年の関ヶ原合戦で家康が勝ち、1603年に将軍になると、多くの大名は家康に参勤するようになりました。家康への忠誠を示すためです。

家康は、大坂城にいる秀吉の遺児秀頼に対しても江戸への参勤を求めています。1614年に発生した方広寺の梵鐘銘文事件は、家康の名前を「国家安康」と分断していると文句をつけて大坂冬の陣のきっかけになりましたが、このとき家康は秀頼が江戸に参勤するか、母の淀殿を人質として送るか、大坂を退去して国替えに応じるか、いずれかを選択するよう迫っています。どれであっても秀頼が家康に服従するものでした。参勤も服属儀礼としての意味を持っていたことがわかります。

ビスカイノの記事で興味深いのは、参勤の目的を、皇帝に服従を表し進物をするため、人質として江戸にいる兄弟や親戚に生活費を持っていくため、参府の道中や宮中で金品を消費するためと、3点あげていることです。

参勤交代は将軍への服従儀礼ですが、この記事を見ると参勤が制度化される以前から、大名に散財させてお金を社会に回すためという経済効果が想定されていたことがわかります。ビスカイノのこの記事は、参勤交代制度の研究にも大いに役立つものなのです。

「楽山公行列図巻」（仙台市博物館収蔵資料データベース）。1842年、13代藩主伊達慶邦（楽山）の行列図。政宗時代はもっと簡素だった。

ひらかわ・あらた
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26―31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。